

同一性・親密性の発達に影響を与える父親要因に関する研究

Study of Perceived Paternal Factors Affecting Identity and Intimacy Development

渡 邊 洋 平

1. 序 論

1. 1 問題の所在

子どもにとって父親とは一体何であろうか。最近では、以前にもまして父親の役割、存在意義といったものが取り沙汰される機会が増えたように思われる。

昨今、わが国の離婚件数は増加の一途を辿り、制度的な家族の崩壊は次第に加速しているような印象を与えるものがある。さらに、単身赴任や職場への長時間拘束による在宅時間の短さなどによって、一家に父親が居るにもかかわらず、実質的に父親不在の状態にある家庭が増加しており、その結果母子関係の過度な密着をまねいているようにも見受けられる。

また、父親が不在になることが青年期特有の病理や問題行動に、大きな影響を与えるといわれている。それについて佐々木（1994）は、以下のよう

「家庭内暴力、登校拒否、やせ症などの心理的問題を生じる青年の家族の特徴として頻繁に指摘されてきたのは、母親の過保護、過干渉といった母性の過剰と、父親の父性の欠如と言う特徴の組合せである。この家族においては、父親は不在がちとなり、子どもと接する機会が乏しい。また、たとえ子どもと接する機会があったとしても、たくましが欠け、存在感が希薄である。このような父親は、権威としても、母親を支えるものとし

ても機能しにくくなり、息子の同一視の対象ともなりにくくなる。」（思春期・青年期の臨床心理学、1994）

さらに、松木(1986)は、「神経性無食欲症(Anorexia Nervosa) 患者において、その父親には、男性的役割や男らしさの欠如といった陰性の男性性別役割同一性の障害が見られる。」と述べているが、摂食障害が思春期に好発するだけに直接的な影響が大きいとはいえ、こうした家族関係が子どもの病理形成に深く関わるのは、必ずしも本症に限ったことではないだろう。

ただ少なくとも昨今のような父親の不在、父性の欠如は、今後益々子どもの発達に大きな影響を与える要因になるものと考えられる。

欧米では、1960年代からさかんに父親不在についての研究が行われていたが、わが国において、最初に父親の不在が問題視され始めたのは、「父親なき世界」(Mitscherlich, A, 1963) が翻訳された1972年になってからのことと見られる。

ちょうど1970年代の高度経済成長期を境に、父親の家父長的権威が徐々に失われ、父親は外に働き出すことで物理的に家庭から姿を消すことと同時に、精神的にも家族から姿を消していくようになり、その流れはそのまま現在へと続いている。

子どもが成長する過程で、両親が大きな影響を与えることは、多くの研究の結果から明らかにされてきたが、その中でも父子関係における研究には、以下のような2つの問題点がある。

第一には、以前から心理学の分野では、父子関係よりも母子関係を重視する傾向があり、「子ども

の発達に影響するのは母親で、父親はそれほど重要ではないといった仮定が根強く残っていた。」(柏木、1993)と言われる。そのため「発達期に乳児に最も影響を与えるのは母親であり、父親はその母親を介して間接的に影響をもつ存在である。」とするいわゆる母性神話の影響から、母子関係の研究が大半を占めていた。

しかしながら、1990年代に入り、これまでの多くの親子研究が母子関係研究に偏りがちであることに対して、批判が出始めた。それは子どものパーソナリティは、母親との関わりだけに影響を受けるのではなく、他者との社会的ななかかわりの中で、様々な影響を受けつつ発達することが次第に実証的に明らかにされたためである。その中でも特に核家族化が進んだ現代において、子どもに影響を与える母親以外の他者の中で、最も身近な他者といえる父親の存在が次第に注目され始め、父子関係を扱った研究が盛んに行われるようになってきたが、まだ母子関係研究に比べてその数が少ないことが挙げられる。

第二に子どもと父親との関係は、「幼児期から、児童期、思春期、青年期と、子どもの発達にともなって当然に親子関係事態も変化し、父親とのかかわりの様相や、父親のかかわりのもつ意味も大きく変化している。」(柏木、1993)とあるように、その時々で変化するものであるにもかかわらず父子関係の研究の多くが、児童期の父子関係についての言及に留まっている点である。

青年期を迎えた子どもは、発達課題の上で最も重要といえる同一性確立の時期であり、その後には自らが社会における男性や女性、そして父親や母親となるために必要不可欠な他者との親密性の確立が控えている。つまり、この時期にあつては、自分の父親や母親が直接的なモデルとなりうる重要な時期と捉えることができよう。

以上の問題点を踏まえ、本研究では、青年期を対象として、その発達に両親、とりわけ父親の存在やあり方がどのような影響を与えるかを明らかにすることを試みる。

1. 2 関連する先行研究の検討と要約

1. 2. 1 子どもの父親役割の認知について

①子どもにとっての父親の役割とは？

父親からの子どもへの影響を考慮する上でまず考えるべきことは、①父親にはどのような役割があり、②子どもは父親の役割をどのように認知しているかということにあるのではないだろうか。

Freud.Sは精神分析理論のなかで、口唇期までは、男児・女児ともに母親を愛情の対象とするが、エディプス期に達すると男児は継続して母親を愛情の対象として、父親に嫉妬と敵意を向け、女児は母親から父親へと愛情の対象を転換し母親に敵意を向けるようになる。そして最終的に、男児・女児共に異性の親からの愛情を獲得するために同性の親を同一視の対象とするようになるという同一視の概念を提示した。

その後、Bandura,A.ら社会学習理論派によって、同一視は観察学習、モデリングとして定着していった。母親の子どもを慈しみ、養育し、暖かい安心感を与える愛情、いたわり、共感的機能を表出的役割とし、他方、危険や緊張の多い外の世界で家族のために働き社会的経済的な達成をとげる父親の役割を道具的役割とした。この父と母の機能分化は単に親としての役割に留まらず社会での男女の役割の分化とも対応している。

子どもは、父親と母親とがこうした異なった機能を持つことを知り、自分が父或いは母のいずれかと同類(同性)だと認識するに及んで、同性の親から持つべき機能と特徴を学ぶ。つまり、子どもは父親から男性的役割(男性性)を母親から女性的役割(女性性)を獲得すると考えられるようになった。

さらに、このBandura,A.らの理論は、男性が外で働き、家庭を母が守るという近現代社会の男女を取り巻く図式に合致している。

つまり、現代社会において、道具的役割を持つ理想的な父親のもとで育った子どもは、望ましい性役割観を獲得するということになる。では、逆に道具的役割を持たない父親や、父親自体が不在

の場合はどうなるのであろうか。

父親不在が子どもにどのような影響を与えるかについては、主に離婚後の母子家庭の子ども達や父親と死別した子ども達を対象として研究が行われている。

山添（1979）は、青年期にある男子の社会的人格適応と父親的要因の関係について、主に米国の心理学専門誌に掲載された論文を分析し、考察を行っている。

その中で特に対人関係の発達に関して、父親と積極的に関わることのできる男子は「安定した男性性の意識を発達させ、現実的自己概念、自分の行動を統制する能力、さらに将来に渡っての職業適応を促進される。また、彼らは、仲間関係から学ぶことも、効果的に他の仲間に影響を及ぼすことも可能であり、男性性が安定しているため、女性性の受容も優れており、彼は職業のみではなく結婚生活においてもよく適応することができる。」とし、父親不在児は「発達上多くの困難を背負っていることになる。父親を剥奪された彼らは、権威的人物のみならず仲間関係の形成が不十分で、非行とか精神的障害に陥りやすい傾向がある。父親不在児は、前青年期から青年期にかけて、異性関係の形成においての困難が多い。」と述べている。

以上のような知見と同一視理論、社会学習理論から類推すると、理想的な父親の存在は性役割観のモデルとなり、父親不在や非理想的な父親のもとで育った子どもは、性役割の獲得に困難が生じると推測することができる。

②父親役割認知尺度の作成

ここで、青年期の子どもが認知している父親像について先行研究を紐解いて概観してみる。

父親研究の分野では、以前から父親像を把握し、その父親像の違いによって、子どもの発達の差を論じる研究が数多くなされている。それらは、養育態度の認知に関する研究と父親役割全般に対する認知に関する研究に大別される。

代表的なものとして、徳田（1987）、戸田（1990）、石川（1985）、小野寺（1984）などは、養育態度と

父親に対する認知の両面から研究を進めている。

以上の先行研究から示唆されることは、第一に「父親像は、単一の概念で説明できるものではなく、幾つかの下位尺度を持った概念である。」ということである。

第二に「男女によって、微妙ではあるが父親像の認知に違いが見られる。」という点である。先行研究によっては、男性もしくは女性のみを被験者としているものもあるが、父親は男性であり、子どもは男女どちらも可能であることを考慮すれば、性差を検討することは重要だと考えられる。

また、第三に「研究された時期によって、父親像に微妙な違いがある。」ことである。前述の先行研究は、最も新しいもので1993年の研究であり、本研究までに10年の歳月が流れている。父親の役割は、父親や家族を取り巻く社会情勢などに大きく影響されるものであることから、現在の時点での父親像を改めて問い直すことが必要だと考えられる。

第四に「父親像には、小野寺（1984）にあるような望まれる理想的父親像と、山添（1981）に見られるような望ましくない非理想的父親像が存在する。」ということである。理想的父親とは、魅力が感じられる、つまり子どもから肯定的な評価を得ている父親であり、非理想的父親とは、幻滅が感じられる、つまり子どもから否定的な評価を得ている父親として捉えられると推測することができる。

よって、本研究においては、男女両性を対象とした調査を行い、現代の青年が認知する父親像を理想的（肯定的）・非理想的（否定的）側面から捉えようとする尺度の作成を第一の目的とする。

1. 2. 2 性役割観および同一性

・親密性について

父親のあり方が性役割観に影響を与えると仮定すると、獲得された性役割観は、青年期を迎えた子どもの発達にどのように関わってくるのであろうか。

青年期とその後の成人期は、発達の上で達成す

べき大きな課題がある。Erikson, E. H. (1977) は、青年期において達成すべき最も重要な課題は、「自我同一性」の確立であり、その次の成人期での課題は「親密性」の確立であると述べている。

自我同一性・親密性の確立は、いまや青年期・成人期にある若者の心性を理解する上で、最も重要なキーワードであるといえよう。

高橋 (1988) は、Bourne (1978) やWaterman (1982) の「性役割観の発達が同一性発達の重要な側面である。」とする指摘に基づき、「同一性VS同一性拡散や親密性VS孤立が、青年期から成人期初期にかけて唐突に浮上する心理・社会的危機ではなく、青年期前期・中期にあらわれてくる様々な変化に対する同化や順応の過程が存在するとし、それは第二性徴に始まる、「性」に関する葛藤が同一性の諸側面を探索する一種の準備期間である。」と述べている。

つまり、青年期前期・中期において、自分は男として、女として如何にありたいか、如何にあるべきかといった葛藤が同一性・親密性確立のための準備段階として必要だと考えられる。以上の観点から、同一性・親密性確立の準備段階として、性役割観の獲得が青年期の大きな課題であるとともに、獲得された性役割観のあり方が同一性・親密性の発達に影響を与えると推測することができる。

①性役割観について

性役割観は、元々生物学的性 (sex) とは別に、文化の中で伝統的に認められてきた男らしさ、女らしさを表すものとして作られた社会的性 (gender) に端を発する。そして個人内に内包される男らしい自己意識を「男性性」、同様に女性らしい自己意識を「女性性」と呼び、一次元の両端に位置するものとして捉え、生物学的な性 (sex) と社会的な性 (gender) が一致した伝統的なステレオタイプな性役割の採用が望ましいとされていた。つまり、生物学的な男性は、男性性が高く、女性性が低いこと、生物学的な女性は男性性が低く、女性性が高いことが望ましいと考えられていた (土肥, 1999)。

しかし、Bakan (1966) の導入した「作動性」と「共同性」の理論以降、「男性性」と「女性性」は、一個人の中で平行して発達するという性役割観が提出された。

そしてBem (1974) は、従来の男性性と女性性に加えて、「男性性的特性と女性性的特性との両方を等しく高く内包する性役割の志向」と定義される、心理学的両性具有性という概念を導き出し、性役割観を男性性 (masculinity) と女性性 (femininity)、そして両性具有性 (androgyny) という概念として捉えた。Bemは、性役割は、両性具有性、男性性優位型、女性性優位型、未分化の4つに分類されるとし、「現代の複雑な社会の中で適応していくためには、個人の内に男女の両特性を合わせ備えたAndrogyny (男女両性具有) が望ましい。」と主張した。さらにBemは、個人における男性性・女性性を測る尺度として、BSRI (Bem Sex Role Inventory) を開発した。BSRIの開発によって、Androgyny研究は、爆発的な勢いで広がり、現在においても、多くの研究が行われている。わが国においても、安達ら (1985) が、日本版BSRIを作成し、盛んな研究が行われている。

②同一性・親密性について

Erikson, E. H. (1977) は、Freud, S. の述べた性的発達の側面に加え、文化・社会的要因を考慮し、対人・社会関係の発達が人格の基盤と心理・社会的危機との力動的かかわりによって達成されるとの観点から、各段階が対になった、8つの発達段階を示した。そして、発達の各段階でそれぞれの解決の危機における葛藤の仕方が重要であるとしている。

その中で、青年期の課題となっているのが、「自我同一性VS役割混乱」であり、前成人期の課題となっているのが「親密VS孤立」である。

そして、青年期における自我同一性が確立されると、成人期を迎え、成人期における課題である親密性を確立すると述べた。

以上のようにErikson, E. H. は、発達段階説の中で8段階の順序を固定し、同一性は青年期に、親

密性は成人期に獲得されるべき課題であると論じている。

つまりErikson, E.Hの説では親密性の獲得には、同一性達成が前提条件として必要であり、本研究のように青年期にある大学生を対象として、親密性を論じることは難しい。

しかしながら、近年における同一性・親密性の研究では、まず青年期に同一性確立がなされた上で、成人期に移行し、親密性確立がなされるという順序の固定に関する批判がなされている。

Matterson (1979) は「同一性は親密性に先行するとは限らない。親密性もまた、同一性を変化させるし、同一性は再度発見され、変えられる。」との見解から、批判を行っている。

またFrenz&White (1985) は、多くの先行研究のreviewから、「同一性は分離に、親密性は愛着プロセスに根源を持ち、互いに深く関連している。そして青年期の発達課題で成熟した同一性と親密性の進歩は同時に起こる。」と論じている。

わが国においても、高橋 (1988) が同一性地位・親密性地位面接により、男女とも、親密性の獲得には同一性の確立が必要であるとしながらも、「同一性形成と親密性形成とが直線的である男子に比べて、女子は男子に比べると複雑な関係を示す。」という研究結果を述べている。

③性役割観と同一性・親密性の関係について

Orlofsky (1977) は、男女大学生を対象にBSRIと同一性地位面接を行い、性役割志向と同一性地位との関連を検討している。その結果、両性ともアンドロジニイ志向が同一性達成と、未分化志向は同一性拡散と関連すること、男性性志向が男子において同一性達成と早期完了、女子において同一性達成と関連すること、女性性志向が、男性においてモラトリウムと同一性拡散と、女子において早期完了と関連することなどを見出している。以上のことからOrlofsky は、男性性特性が男女共通して女性性特性よりも同一性形成に重要であると結論している。

Schiedel&Marcia (1985) は、男女大学生を対

象にBSRIと同一性地位面接を行い、男女とも男性性得点のみが同一性地位間で有意な差異があり、同一性達成はモラトリウムや早期完了より高い男性性得点を示しているという結果を導いている。

わが国においては、高橋 (1988) が女子大学生を対象に同一性地位面接とBSRIを改良したBSIを行い、同一性地位のいずれの領域においても男性性高群と男性性低群の間に有意な差異があり、男性性高群では同一性達成が、男性性低群では早期完了が多いことを見出している。

また、伊藤 (1994) は、男女大学生に伊藤 (1978) が作成したM-H-F尺度とRusmussenのEIS (ego identity scale) のV段階 (同一性) とVI段階 (親密性) を行い、高同一性群は、低同一性群よりも有意に男性性得点が高くなることを見出している。

以上の結果は、一般に男性のみならず女性においても男性性的な機能が女性性的な機能より自我同一性の獲得に重要な要因であることを示していると推察される。

性役割観と親密性については、女子における親密性地位面接の妥当性が十分に検討されていないため、同一性と比べ研究は少ない。

しかしながら、Schiedel&Marcia (1985) は男女大学生を対象に男性性・女性性と親密性地位との検討を行っている。その結果、女性性得点において、男子では高い親密性地位の者が、低い親密性地位の者より高い得点を示しているが、女子においては有意な差異が見出されていない。

前出の高橋 (1988) では、女子において男性性得点の高群と低群で親密性地位に有意な差があり、親密性の質に差異が認められている。また、伊藤 (1994) においては親密性と女性性のついて検討が行われたが、有意な結果は見られなかった。よって男子においては女性性が、女性においては男性性が親密性の獲得に影響を与えると推察される。

以上の結果から、男性においては、男性性が同一性の獲得と関連を持ち、女性性が親密性の獲得と関連を持つことが推測される。同様に、女性においては、男性性が同一性・親密性両方の獲得と関連を持つことが推測される。

2. 本研究の目的

ここで本研究の目的を整理する。

本研究の目的は、父親が青年期の子どもの発達にどのような影響を与えているかを検討することにある。

前述したように、目的の1つ目は、男女両性を対象とした調査を行い、現代の青年が認知する理想的・非理想的父親像を明らかにする尺度の作成である。

目的の2つ目は、目的の1つ目に添って作成された尺度を用いて、父親に対する子どもの認知と自我同一性と親密性の関連を考察する。

その際に青年期男女の同一性発達の前段階とも言える性役割観の発達に焦点を当て、性役割観・同一性・親密性の3者間の関連を考慮に入れつつ、性役割観が自我同一性・親密性の獲得へと至る道筋にどのような影響を与えるか検証を行う。

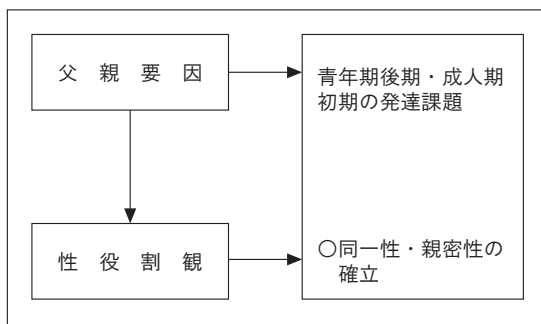


図1 3者関係における仮説パス図

図1は、父親要因と性役割観・発達課題の関連の仮説パス図である。先行研究等から以下の仮説が考えられる。

- 三者間の関連においては、父親の役割に対する肯定的あるいは否定的な認知は、性役割観の発達、特に男性性の発達に影響を及ぼすだろう。
- 男性における男性性は、同一性の獲得に影響を及ぼすという先行研究の結果を考慮す

ると、本研究においても男性性は、同一性に対して影響を及ぼすだろう。

- 女性においても、父親要因は、男性性の発達に影響を与えるだろう。そして、女性における男性性は、同一性・親密性の両方に影響を与えるという先行研究の結果を考慮すると、女性における男性性は、同一性および親密性に影響を与えるだろう。
- 父親の役割は、女性性の発達には影響しないだろう。そのため、父親要因は男女共に、女性性に影響を与えないと考えられる。そして、男性における親密性獲得は女性性に影響を受けるという先行研究の結果から、父親の役割の認知は、親密性の発達に直接的・間接的に影響を与えないだろう。

以上の仮説を基に、肯定感・否定感の各下位尺度が性役割観、同一性・親密性に対してどのように影響を与えるかを探索的に検討することとする。

3. 対象と方法

3.1 被調査者

H大学の男女大学生・大学院生76名（男性19名、女性57名）、I大学の男女大学生・大学院生58名（男性40名、女性18名）、B大学の男女大学生32名（男性14名、女性18名）、R大学の男女大学生・大学院生133名（男性94名、女性39名）、D大学の男子学生29名、I専門学校の男女学生54名（男性9名、女性45名）の計382名（男性205名、女性177名）から回答を得た。

その中から、全項目について欠損値のない者276名（男性146名、女性130名）を分析の対象とした。被検者の平均年齢は、男性20.67歳、女性20.79歳であった。

3. 2 調査時期・実施方法

調査は、2002年10月から11月にかけて行われた。

B大学、R大学、I専門学校では、授業時間中の集合調査を実施した。H大学では授業時間中の集合調査と留め置き調査を実施し、I大学とD大学では、留め置き調査のみを実施した。

3. 3 質問紙構成

質問紙構成は、フェイスシートとして、性別・年齢・職業・居住形態(同居・別居・離別・死別・その他)、現在の親密な異性の有無を問う項目と父親に対する肯定感・否定感を測るための尺度として、前述の予備調査にて作成された「父親認知尺度項目」(長所・短所各45項目、計90項目、表1・表2参照)を用い、同時に性役割観・自我同一性・親密性・異性との親密性を測る尺度をカウンターバランスを考慮して、各尺度の回答順を変えて実施した。

①父親役割認知尺度

本調査に先立ち、自由記述式の予備調査を行い、そこから肯定感(長所)45項目と否定感(短所)45項目を抽出し、それらを全90項目からなる「父親役割認知尺度」とした。

その尺度に対して、「以下の項目はあなたの父親にどのくらい当てはまりますか？」の指示にしたがって回答を求めた。回答はリッカート法で、安易な回答態度を防止するため“どちらでもない”とする中点を意図的に除外して、“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”までの6段階評定を設定した。

②性役割観尺度

安達ら(1985)によって開発されたBem(1974)の「BSRI」(the Bem Sex-Role Inventory)の日本語版である「日本版BSRI」は、男性性項目・女性性項目・中性項目の各20項目、計60項目からな

る尺度である。

本研究においては、その中から、男性性項目と女性性項目の計40項目(以下、男性性尺度・女性性尺度とする)を用いた。評定法および指示に関しては、安達らの方法に準じて、「それぞれの項目を読んで、その項目がどの程度あなた自身に当てはまるか、また当てはまらないかを記入してください。」との指示の基、“非常に当てはまらない”から“非常に当てはまる”までのリッカート法による7段階評定にて回答を求めた。

③自我同一性・親密性尺度

自我同一性と親密性の測度には、宮下(1987)の「REIS(Rasmussen's Ego Identity Scale)」を用いた。本尺度はエリクソンの発達漸成理論図式における最初の6段階の危機の解決を測定しようとするものである。

本研究においては、その中から、第V段階12項目(青年期—同一性VS同一性拡散、以下、同一性尺度とする)と第VI段階10項目(成人期—親密性VS孤立、以下、親密性尺度とする)を用いた。実施に当たっては、宮下に従い「次の項目のそれぞれについて、あなたにどの程度当てはまるかを考え、該当する選択肢一つに○をつけて下さい。」と指示し、“全くそう思わない”から“非常にそう思う”までのリッカート法による7段階評定にて回答を求めた。

4. 結 果

4. 1 父親役割認知尺度の分析

①因子分析結果

肯定感(長所)・否定感(短所)の評定の結果を“全く当てはまらない”から“非常に当てはまる”までの6段階評定に1—6までの得点を与えた。続いて、男女別に肯定感・否定感の内容を分類する目的で、長所項目、短所項目をそれぞれ主因子法バリマックス回転により、因子分析を行った。

表1 肯定感（長所）項目

項 目	因子1	因子2	因子3	共 通 性
39 責任感が強い。	-0.7397	-0.2659	0.1175	0.6772
16 真面目である。	-0.7039	-0.0563	0.2054	0.5507
19 他人に流されない。	-0.7038	-0.0961	0.1385	0.5426
27 一家の大黒柱として、家族を支えている。	-0.6866	-0.1657	0.2278	0.5833
9 仕事熱心である。	-0.6678	-0.1556	-0.1760	0.5546
20 物事を良く知っている。	-0.6640	-0.0409	0.2593	0.5485
42 周囲からの信頼が高い。	-0.6502	-0.2192	0.1605	0.6504
18 経済的に頼れる。	-0.6405	0.1531	0.3281	0.6075
40 父は良い手本である。	-0.5858	-0.3563	0.3575	0.7118
17 精神的に頼れる。	-0.5826	-0.3598	0.3579	0.6881
13 言葉づかいや礼儀が正しい。	-0.4961	-0.3092	0.2542	0.5091
25 家の仕事をする。	0.0114	-0.7702	0.1593	0.6371
2 他人に対して思いやりがある。	-0.3793	-0.5209	0.1702	0.6070
3 共通の話題で話することができる。	-0.2337	-0.5143	0.3804	0.4904
45 母を大切にしている。	-0.4281	-0.5019	0.3115	0.6545
34 母に対する理解がある。	-0.3858	-0.5001	0.2284	0.6187
37 食事はなるべく家族とする。	-0.2599	-0.4805	0.3736	0.4386
4 祖父母を大切にしている。	-0.3659	-0.4685	0.0254	0.4037
36 物質的な面での援助	-0.1067	-0.0077	0.7286	0.5645
10 あなたと一緒に行動する時間を作ってくれる。	-0.1210	-0.3497	0.6878	0.6346
41 色々なところへ連れて行ってくれる。	-0.1828	-0.1896	0.6803	0.5919
29 あなたとの関わりを大切にしている。	-0.3108	-0.4803	0.5579	0.6833
12 母と一緒に外出する。	-0.2339	-0.3125	0.4461	0.3621
30 仕事とプライベートを割り切っている。	-0.3257	-0.2666	0.4260	0.3706
固 有 値	6.1242	4.2092	3.5378	13.8712
説 明 率 (%)	25.5175	17.5383	14.7408	57.7966

その結果、長所項目・短所項目とも、当初5因子構造が最も適切と思われたが、第4・第5因子の固有値が低く、項目数が極端に減少することから、それぞれ因子1から因子3までを有効と判断し、再度最小二乗法による因子分析を行い、抽出された各3因子を肯定感・否定感尺度として採用した。次ページの表1・2に結果を示す。

表1に肯定感因子項目を示す。因子1は、「責任感が強い。」「他人に流されない。」「一家の大黒柱として、家族を支えている。」といった父親の肯定的な人柄への評価や社会的信頼感に関する項目

によって構成されていることから、「人間的魅力」とした。

因子2は、「家の仕事をする。」「共通の話題で話することができる。」「母を大切にしている。」など、家族に対する協力的・親和的な項目によって構成されていることから、「家族との親和」とした。

因子3は、「物質的な面での援助をしてくれる。」「あなたと一緒に行動する時間を作ってくれる。」「あなたとの関わりを大切にしている。」といった、被検者である子どもとの親和的関係に関する項目から構成されていることから、「子どもとの親和」

とした。

表2に否定感因子項目を示す。因子1は、「母を大切にしない」、「母に対する理解がない」、「母と一緒に行動しない」、「子育てに参加しない」など、家族、特に母親に対する否定的態度に関する項目から構成されていることから、「母親への親和欠如」とした。

因子2は、「攻撃的行動（叩く、物を投げる、どなるetc.）をする」、「気に食わないことがあると周囲に八つ当たりをする」、「短気である」、「自分の意見を人に押し付ける」といった、傍若無人な振

る舞いに関する項目から構成されていることから、「自己中心的態度」とした。

因子3は、「後片付けをしない」、「家の仕事をしない」、「家事を手伝わない」、「家の中でだらしない行動をする。」といった家庭内での怠慢な行動や態度に関する項目から構成されていることから、「家庭でのだらしなさ」とした。

②項目分析

尺度の内的整合性を見るために、項目分析として、各項目とその項目を除いた各下位尺度得点と

表2 否定感（短所）項目

項 目	Factor 1	Factor 2	Factor 3	共 通 性
28 母を大切にしない。	0.7912	0.3120	-0.1127	0.7615
19 母に対する理解がない。	0.7231	0.2857	-0.1378	0.6441
15 母と一緒に行動しない。	0.7031	0.0409	-0.1977	0.5559
20 あなたとの会話がない。	0.6445	0.2678	-0.2569	0.6233
22 子育てに参加しない。	0.6345	0.1278	-0.4117	0.6369
37 家族と一緒に居ない。	0.6114	0.0607	-0.2732	0.5107
30 見習うべき点がない。	0.5936	0.3577	-0.1752	0.6980
17 父のような人にはなりたくない。	0.5706	0.4041	-0.2236	0.6381
21 食事のマナーが悪い。	0.5423	0.1257	-0.4018	0.5127
26 祖父母を大切にしない。	0.5345	0.2484	-0.0158	0.4172
35 攻撃的行動（叩く、物を投げる、どなるetc.）をする。	0.1623	0.7450	-0.1094	0.6098
24 気に食わないことがあると周囲に八つ当たりをする。	0.2385	0.7028	-0.2730	0.7062
12 短気である。	0.0698	0.6917	-0.1310	0.5617
14 自分（父）の意見を人に押し付ける。	0.2092	0.6670	-0.2716	0.5785
27 あなたの行動に干渉する。	0.1694	0.6389	-0.1016	0.4605
45 あなたに対して厳しい。	0.0905	0.6012	-0.0952	0.4426
29 頑固である。	0.0619	0.5957	-0.3249	0.4933
42 自己中心的である。	0.2797	0.5856	-0.4004	0.6754
8 悪口や愚痴を言う。	0.4009	0.5398	-0.0053	0.5763
9 細かいことを気にする。	0.2371	0.4987	0.2136	0.3796
5 後片付けをしない。	0.1314	0.1441	-0.7847	0.7004
40 家の仕事をしない。	0.3017	0.1709	-0.7044	0.6190
23 家事を手伝わない。	0.3374	0.1805	-0.6993	0.6366
44 家の中でだらしない行動をする。	0.1787	0.2249	-0.5959	0.5221
38 面倒くさがり屋である。	0.1914	0.1429	-0.5570	0.4866
固 有 値	5.1652	4.8776	3.5897	13.6325
説 明 率 (%)	20.6608	19.5104	14.3588	54.5300

表 3 各下位尺度における α 信頼性係数

	人間的魅力	家族との親和	子どもとの親和	母親への親和欠如	自己中心的態度	家庭でのだらしなさ
α 係数	0.8263	0.7625	0.8017	0.6723	0.7828	0.7730

の相関係数を求めた。その結果、「人間的魅力」($r=.53\sim.75$)、「家族との親和」($r=.48\sim.75$)、「子どもとの親和」($r=.43\sim.69$)、「母親への親和欠如」($r=.52\sim.79$)、「自己中心的態度」($r=.40\sim.76$)、「家庭でのだらしなさ」($r=.55\sim.71$)と全ての尺度について、比較的安定した相関係数が得られた。

③GP分析

各下位尺度の項目の弁別力を確認するために、GP分析（上位下位分析）を行った。まず、分析対象者276名の内、各下位尺度の合計得点の第3四分位以上を上位群、第1四分位以下を下位群として分け、t検定によるGP分析を行った。

「人間的魅力」では下位群77名（レンジ11～43点）、上位群76名（レンジ56～66点）で11項目全てに0.1%水準で有意差が見られた。

「家族との親和」では下位群81名（レンジ7～25点）、上位群73名（レンジ34～42点）で7項目全てに0.1%水準で有意差が見られた。

「子どもとの親和」では下位群79名（レンジ6～20点）、上位群73名（レンジ28～36点）で6項目全てに0.1%水準で有意差が見られた。

「母親への親和欠如」では下位群88名（レンジ

10～18点）、上位群77名（レンジ31～60点）で10項目全てに0.1%水準で有意差が見られた。

「自己中心的態度」では下位群78名（レンジ10～25点）、上位群71名（レンジ38～60点）で10項目全てに0.1%水準で有意差が見られた。

「家庭でのだらしなさ」では下位群84名（レンジ5～12点）、上位群74名（レンジ21～30点）で5項目全てに0.1%水準で有意差が見られた。

よって、全ての尺度の項目間に0.1%水準で有意差が見られたことから、尺度としての弁別性が確認された。

④信頼性係数の算出

尺度の信頼性を吟味するために、Cronbackの α 係数を算出したところ、いずれも高い値を示した。結果を表3に示す。

⑤下位尺度間の相関

各下位尺度間の相関を表4に示す。その結果、肯定感3尺度内および否定感3尺度内では全ての高い正の相関が見られ、肯定感3尺度と否定感3

表 4 下位尺度間の相関係数 (n=246)

*** $P<.001$

		肯定感			否定感		
		人間的魅力	家族との親和	子どもとの親和	母親への親和欠如	自己中心的態度	家庭でのだらしなさ
肯定感	人間的魅力						
	家族との親和	0.669***					
	子どもとの親和	0.616***	0.701***				
否定感	母親への親和欠如	-0.699***	-0.847***	-0.724***			
	自己中心的態度	-0.424***	-0.548***	-0.411***	0.630***		
	家庭でのだらしなさ	-0.567***	-0.624***	-0.569***	0.643***	0.506***	

表5 父親役割認知尺度の下位尺度における男女比較

		肯定感因子			否定感因子		
		人間的魅力	家族との親和	子どもとの親和	母親への親和欠如	自己中心的態度	家庭でのだらしなさ
男性 n=146	mean	4.507	4.147	3.809	2.461	3.124	3.077
	SD	0.899	0.985	0.981	1.055	1.059	1.153
女性 n=130	mean	4.364	4.065	3.994	2.568	3.299	3.446
	SD	0.971	0.964	1.031	0.998	1.029	1.249
							*

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

尺度間には、全て高い負の相関が見られた。

4. 2 父親役割認知尺度の男女間比較

父親役割認知尺度の各下位尺度における尺度得点の比較を行い、結果を表7に示した。

その結果、男女における被検者間比較の結果では、「家庭でのだらしなさ」で、女性の方が男性よりも有意に得点が高かった。(t(274)=2.554,p<.05)

次に各下位尺度の被検者内比較を男女別で行った。結果を表6・7に示す。

男女別に肯定感下位尺度と否定感下位尺度について、これを被験者内要因とする1要因分散分析を行った。

その結果、男性の肯定感の各下位尺度間では、水準間で有意差が見られた(F(2,290)=63.08,p<.001)。TUKEY法による多重比較の結果「人間的魅力」、「家族との親和」、「子どもとの親和」の順に得点がありに高くなった。

また、男性の否定感の各下位尺度間でも、水準間で有意差が見られた(F(2,290)=44.24,p<.001)。TUKEY法による多重比較の結果、「母親への親和欠如」の得点は「自己中心的態度」、「家庭でのだらしなさ」と比較して、有意に低かった。

女性の肯定感の各下位尺度間では、水準間で有意差が見られた(F(2,258)=14.40,p<.001)。TUKEY法による多重比較の結果「人間的魅力」の得点は、「家族との親和」、「子どもとの親和」よりも有意に高くなった。

表6 男性における父親役割認知尺度の被検者内比較

要 因	S S	自由度	M S	F 値
肯定感下位尺度	35.526	2	17.763	63.08***
被 検 者	315.623	145	2.177	
残 差	81.666	290	0.282	
Total	432.815	437		
否定感下位尺度	39.954	2	19.977	44.24***
被 検 者	385.668	145	2.660	
残 差	130.946	290	0.452	
Total	556.568	437		

***p<.001

表7 女性における父親役割認知尺度の被検者内比較

要 因	S S	自由度	M S	F 値
肯定感下位尺度	10.063	2	5.032	14.40***
被 検 者	288.283	129	2.235	
残 差	90.122	258	0.349	
Total	388.469	389		
否定感下位尺度	57.322	2	28.661	52.35***
被 検 者	325.067	129	2.520	
残 差	141.245	258	0.547	
Total	523.633	389		

***p<.001

表8 男性における各尺度間の相関係数 (n=146)

	男 性 性	女 性 性	同 一 性	親 密 性
人 間 的 魅 力	0.179 *	0.236 **	0.180 *	0.179 *
家 族 と の 親 和	0.125	0.227 **	0.151 +	0.138 +
子 ども と の 親 和	0.090	0.248 **	0.129	0.138 +
母 親 へ の 親 和 欠 如	-0.142 +	-0.181 *	-0.169 *	-0.170 *
自 己 中 心 的 態 度	-0.088	-0.189 *	-0.143 +	-0.163 +
家 庭 で の だ ら し な さ	-0.126	-0.224 **	-0.102	-0.073
男 性 性	— —	0.448 ***	0.460 ***	0.594 ***
女 性 性	0.448 ***	— —	0.270 **	0.350 ***

+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

表9 女性における各尺度間の相関係数 (n=130)

	男 性 性	女 性 性	同 一 性	親 密 性
人 間 的 魅 力	0.187 *	0.045	0.14	0.189 *
家 族 と の 親 和	0.100	0.029	0.005	0.148 +
子 ども と の 親 和	0.013	0.001	0.038	0.173 *
母 親 へ の 親 和 欠 如	-0.106	0.018	-0.071	-0.205 *
自 己 中 心 的 態 度	-0.112	-0.006	-0.06	-0.087
家 庭 で の だ ら し な さ	-0.035	0.012	0.035	-0.133
男 性 性	— —	0.251 **	0.500 ***	0.527 ***
女 性 性	0.251 **	— —	0.207 *	0.149 +

+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

また、女性の否定感の各下位尺度間でも、水準間で有意差が見られた ($F(2,258)=52.35, p<.001$)。TUKEY法による多重比較の結果、「母親への親和

欠如」の得点は「自己中心的態度」、「家庭でのだらしさ」と比較して、有意に低かった。

4. 3 尺度間の相関

父親役割認知尺度の各下位尺度と性役割観・同一性・親密性の相関係数を男女別に算出した。結果を表8・9に示す。

男性においては、各父親要因と男性性・女性性・同一性・親密性の全ての得点に対し、満遍なく相関が見られた。

肯定感要因では、「人間的魅力」において全ての要因に対し、弱い正の相関が見られた。「家族との親和」では、女性性・同一性・親密性との間に弱い正の相関が見られた。「子どもとの親和」においては、女性性と親密性において弱い正の相関が見られた。

否定感要因では、「母親への親和欠如」で全ての変数との間に弱い負の相関が見られた。「自己中心的態度」では、女性性・同一性・親密性との間に弱い負の相関が見られた。「家庭でのだらしなさ」では、女性性との間に弱い負の相関が見られた。また、男性性においては、同一性・親密性との間にやや強い正の相関が見られた。女性性においては、同一性・親密性と弱い正の相関が見られた。以上のことから、父親要因は、男性性・女性性・同一性・親密性の全ての要因に対して何らかの関連があることが推察され、また、男性性・女性性は同一性・親密性に対して強い関連があることが推察される。

また、女性においては、全体的に相関が低く、殆ど父親要因が同一性・親密性に関与していないことが推察される。

しかしながら、「人間的魅力」と男性性・親密性、「家族との親和」、「子どもとの親和」、「母親への親和欠如」と親密性の間に弱い相関が見られた。

また、男性性と同一性・親密性の間には、やや強い正の相関がみられ、女性性と同一性・親密性の間には弱い正の相関が見られた。

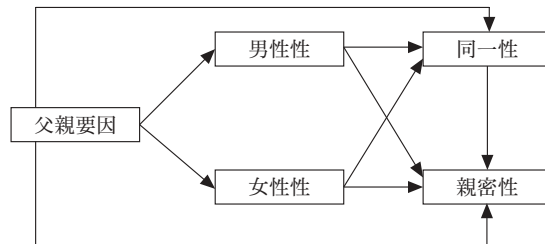
以上のことから、女性においては、父親要因は男性性と親密性の発達に関連があると推察され、また、男性性と女性性が同一性・親密性の発達に関連があることが推察される。

4. 4 父親要因と親密性発達過程との関係

①仮説パス図

先行研究とここまでの結果を踏まえ、仮説パス図を作成し、図2に示す。

図2 3者間の関連における仮説パス図



当初、父親要因と同一性・親密性の間には直接の因果関係がないものと仮定していたが、相関の結果を考慮すると父親要因が全ての変数に対して何らかの関連をもつと推察される。

また、同一性と親密性の関係に関しては、男性においては、同一性得点が有意に親密性得点よりも高いことから、同一性が親密性よりも先行して発達すると推察され、女性においては、同一性・親密性得点間に有意な差がなく、同時並行的に発達するという先行研究を支持する結果が推察される。しかしながら、発達の時系列的な性差はあれ、同一性が親密性発達の前提条件であることは多くの先行研究等から明らかになっていることから本研究においても、同一性を親密性発達の先行条件として扱うこととする。

②パス解析の結果

仮説パス図に従って、父親要因の6下位尺度と他の変数間のパス解析を行った。その結果を下位尺度ごとに男女間で比較を行った。なお、結果のパス図においては、5%水準で有意なパス(C.R.>1.96)を太実線で描き、係数の隣にアスタリスクをつける。それ以外のパスは点線で描くこととする。

1. 「人間的魅力」

図3 男性における「人間的魅力」のパス解析

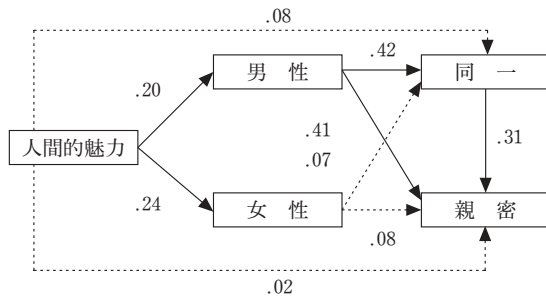


図4 女性における「人間的魅力」のパス解析

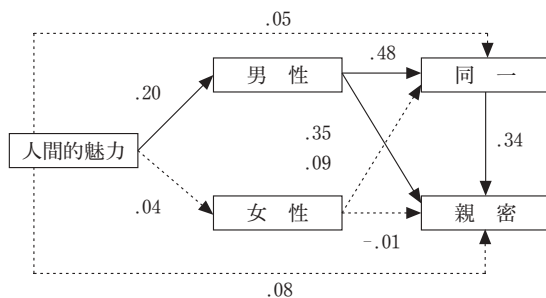


図3・4は、男女における「人間的魅力」のパス解析結果である。

男性では、「人間的魅力」は男性性・女性性両方の発達に影響があり、また男性性は、同一性・親密性に影響力をもっている。すなわち、「人間的魅力」は、男性性や同一性を媒介して親密性に影響を及ぼすと推察される。

女性でも、男性と同様に、「人間的魅力」は男性性に影響を及ぼし、さらに男性性は同一性・親密性に影響を及ぼす。また、同一性は親密性に影響を及ぼすことから、間接的ではあるが「人間的魅力」は、親密性の発達に影響を及ぼすことが推察される。

よって、「人間的魅力」は父親の人間的魅力や社会人としての信頼性を肯定的に評価している内容であることから、子どもが「人間的魅力」を感じる父親の場合は、男性であれば性役割観や同一性・親密性の発達が促進されることが推察される。

また、女性においても「人間的魅力」のある父親を持つ子どもは、男性性の発達が促進され、その影響を受け、同一性・親密性も発達が促されることが推察される。

2. 「家族との親和」

図5 男性における「家族との親和」のパス解析

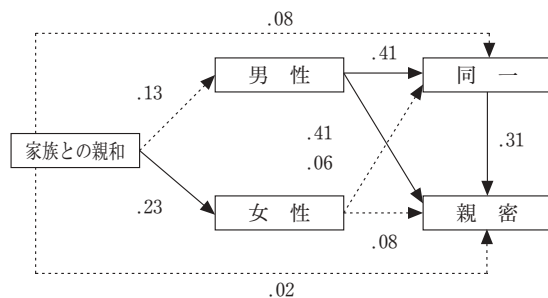


図6 女性における「家族との親和」のパス解析

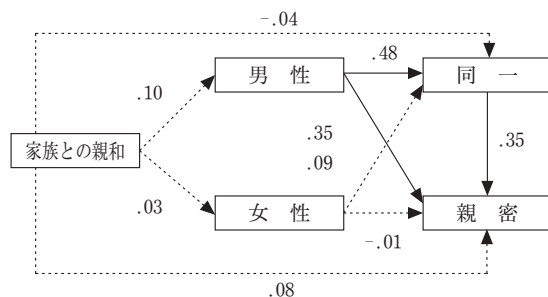


図5・6は、男女における「家族との親和」のパス解析結果である。

男性においては、「家族との親和」は、女性性の発達に影響をもっている。そして「人間的魅力」と同様に男性性は、同一性・親密性に影響力をもつ。女性性が親密性に対して直接的・間接的に影響を及ぼしていないことから、「家族との親和」は、同一性・親密性に影響を及ぼしていないと推察される。

女性においては、男性性から同一性・親密性への影響と同一性から親密性への影響は見られたが、「家族との親和」自体は他のどの変数にも影響を与えていない。よって、女性における「家族との

親和」は、同一性・親密性に影響力を持たないと推察される。

以上のことから父親に対する家庭的な面での肯定感、男性においては、女性性の発達に影響を与えるものの、男女共通して、同一性・親密性の発達に影響力を持たないことが推察される。

3. 「子どもとの親和」

図7 男性における「子どもとの親和」のパス解析

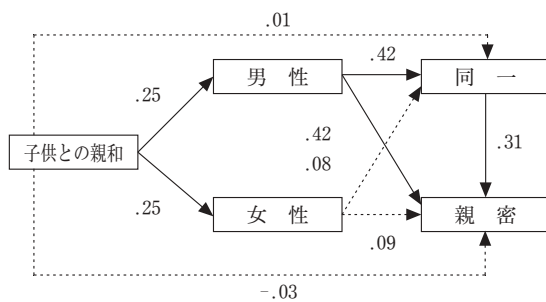


図8 女性における「子どもとの親和」のパス解析

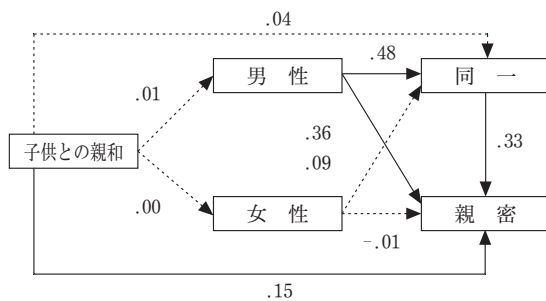


図7・8は、男女における「子どもとの親和」のパス解析結果である。

男性において「子どもとの親和」は、男性性・女性性両方の発達に影響力があり、また男性性は、同一性・親密性に影響力をもつことが推察される。すなわち、「子どもとの親和」は、男性性を媒介として、同一性や親密性に影響を及ぼすと推察される。

女性において、男性性が同一性・親密性に影響を及ぼす過程は男性と同様であるが、「子どもとの親和」は、性役割観に影響を及ぼさず、親密性に直

接影響を及ぼすことが明らかとなった。

よって、男女によって、その過程は異なっているものの、父親が「子どもとの親和」的であることは、両性にとって親密性の発達に大きな影響力をもつことが推察される。

4. 「母親への親和欠如」

図9 男性における「母親への親和欠如」のパス解析

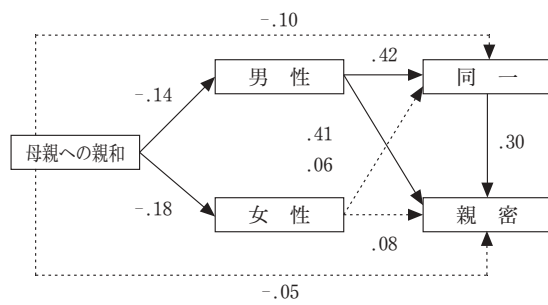


図10 女性における「母親への親和欠如」のパス解析

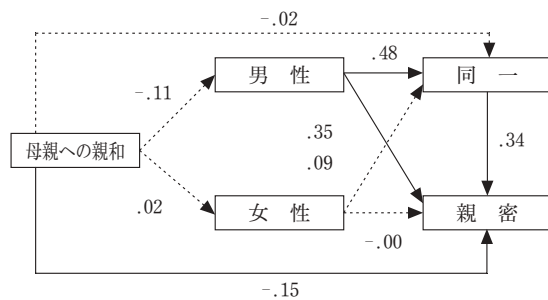


図9・10は、男女における「母親への親和欠如」のパス解析結果である。

男性においては、「母親への親和欠如」は、女性性の発達に影響力をもっている。そして他の要因と同様に男性性は、同一性・親密性に影響力をもつ。女性性が親密性に対して直接的・間接的に影響を及ぼしていないことから、「母親への親和欠如」は、親密性に影響を及ぼしていないと推察される。

女性においては、「母親への親和欠如」は、直接的に親密性に影響力を持っている。また他の要因同様に男性性から同一性・親密性への影響と同一性から親密性への影響が見られる。つまり「母親

への親和欠如」自体は性役割観に影響力を持たないものの、「子どもとの親和」と同様に直接的に親密性の発達に影響を与えていると推察される。

5. 「自己中心的態度」

図11 男性における「自己中心的態度」のパス解析

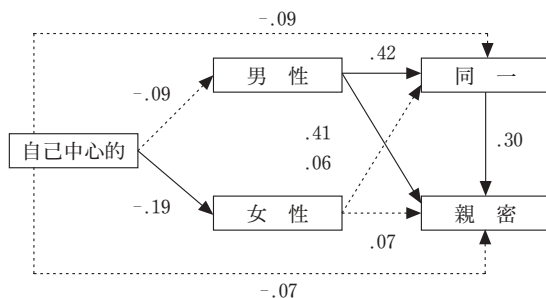


図12 女性における「自己中心的態度」のパス解析

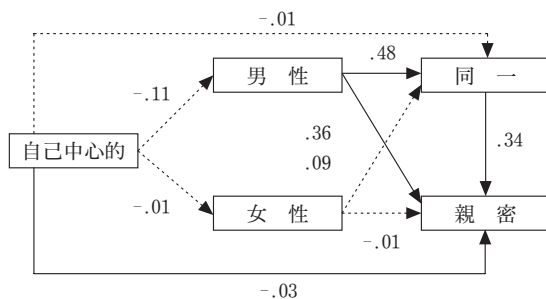


図11・12は、男女における「自己中心的態度」のパス解析結果である。

男女とも他の要因同様に、男性性が同一性・親密性に影響力を持ち、同一性が親密性に影響力を持っている。

それ以外に男性において「自己中心的態度」は、女性性の発達に影響力をもつ。しかしながら女性性が同一性・親密性に対して直接的・間接的に影響を及ぼしていないことから、「自己中心的態度」は、同一性・親密性の発達に影響を及ぼしていないと推察される。また、女性においても、全ての変数に対して影響力をもたないことから、同一性・親密性に及ぼす影響はないものと推察される。

6. 「家庭でのだらしなさ」

図13 男性における「家庭でのだらしなさ」のパス解析

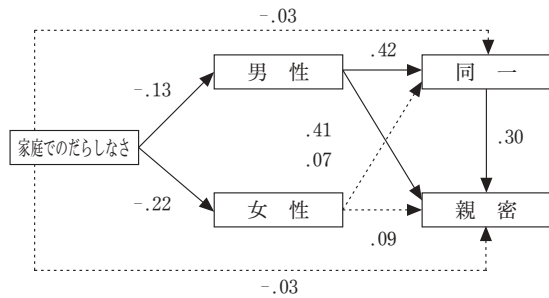


図14 女性における「家庭でのだらしなさ」のパス解析

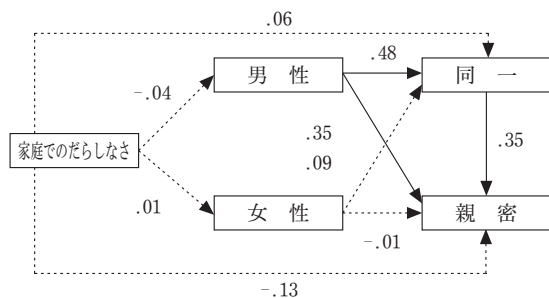


図13・14は、男女における「家庭でのだらしなさ」のパス解析結果である。

男女とも他の要因同様に、男性性が同一性・親密性に影響力を持ち、同一性が親密性に影響力を持っている。

それ以外に男性においてのみ、「家庭でのだらしなさ」は、「自己中心的態度」と同様に女性性の発達に影響力をもつ。しかしながら女性性が同一性・親密性に対して直接的・間接的に影響を及ぼしていないことから、「自己中心的態度」は、同一性・親密性に影響を及ぼしていないと推察される。また、女性においても、全ての変数に対して影響力をもたないことから、同一性・親密性に及ぼす影響はないものと推察される。

③プロフィール分析

次に父親に対する肯定感と否定感の組合せによって、性役割観と同一性・親密性がどのように変化するかを明らかにする目的で、男女別にプロフィール分析を行った。

まず、肯定感尺度の全24項目の因子得点の合計を算出し、最低点から平均-0.5SDまでを低肯定群（レンジ：男性 24～91点、女性 29～90点）、平均+0.5SDから最高点までを高肯定群（レンジ：男性112～141点、女性111～137点）、とした。同様に否定感

得点においても、全25項目の因子得点の合計を算出し、最低点から平均-0.5SDまでを低否定群（レンジ：男性28～59点、女性38～65点）、平均+0.5SDから最高点までを高否定群（レンジ：男性84～150点、女性88～143点）とした。

そして、各群を組み合わせ、両高群（高肯定、高否定）、肯定群（高肯定、低否定）、否定群（低肯定、高否定）、両低群（低肯定、低否定）の4群を作成した。しかし、男性においては、両高群に該当するものが居なかった。また、女性においては、両高群、両低群に該当するものが居なかった。

表10 男性における1要因分散分析

	要 因	S S	自由度	M S	値
男性性	父 親 認 知 群	1806.610	2	903.305	1.79
	誤 差	31327.851	62	505.288	
	Total	33134.462	64		
女性性	父 親 認 知 群	1634.894	2	817.447	2.45+
	誤 差	20683.352	62		
	Total	22318.246	64		
同一性	父 親 認 知 群	271.728	2	135.864	1.10
	誤 差	7644.519	62	123.299	
	Total	7916.246	64		
親密性	父 親 認 知 群	458.394	2	229.197	2.25
	誤 差	6304.468	62	101.685	
	Total	6762.862	64		

+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

表11 女性における1要因分散分析

	要 因	S S	自由度	M S	値
男性性	父 親 認 知 群	2029.159	1	2029.159	5.44*
	誤 差	19379.674	52	372.686	
	Total	21408.833	53		
女性性	父 親 認 知 群	10.332	1	10.332	0.06
	誤 差	9459.001	52	181.904	
	Total	9469.333	53		
同一性	父 親 認 知 群	231.574	1	231.574	1.78
	誤 差	6774.519	52	130.279	
	Total	7006.093	53		
親密性	父 親 認 知 群	296.666	1	296.666	4.47*
	誤 差	3448.668	52	66.321	
	Total	3745.333	53		

+p<.10 *p<.05 **p<.01 ***p<.001

そこで、男性では肯定群・否定群・両貧群の3群で、女性は肯定群と否定群の2群において、性役割観と同一性・親密性を従属変数とした1要因分散分析を行った。

表10は、男性における1要因分散分析結果である。男性においては、男性性では水準間に有意差は見られなかった ($F(2,62)=1.79, n.s.$)。同様に、同一性においても水準間に有意差は見られず ($F(2,62)=1.10, n.s.$)、親密性においても水準間に有意差は見られなかった ($F(2,62)=2.25, n.s.$)。しかしながら、女性性において水準間で有意傾向が見られた ($F(2,62)=2.45, p<.10$)。TUKEY法による多重比較の結果、肯定群は否定群に比べ、有意に女性性得点が高かった。両貧群と他の群との間には有意な差は見られなかった。

また、表11は、女性における1要因分散分析結果である。女性においては、女性性では水準間に有意差は見られなかった ($F(1,52)=0.06, n.s.$)。同様に、同一性においても水準間に有意差は見られず ($F(1,52)=1.78, n.s.$)。

しかしながら、男性性において水準間で有意差が見られ ($F(1,52)=5.44, p<.05$)、肯定群は否定群に比べ、有意に男性性得点が高かった。

また、親密性においても水準間に有意差が見られ ($F(1,52)=4.47, p<.05$)、肯定群は否定群に比べ、有意に男性性得点が高かった。

5. 考 察

5. 1 父親役割認知尺度について

本研究においては、子どもの父親に対する役割の認知が、肯定的・否定的の2つの側面からなされ、かつそれらは、男女で異なった下位尺度をもっているという仮説の基に、父親の日常における行動や態度から、父親の役割に対する認知を測定するための尺度を作成することを第一の目的とした。

因子分析の結果、肯定感に関する「人間的魅力」、「家族との親和」、「子どもとの親和」の3因子と、否定感に関する「母親への親和欠如」、「自己中心的態度」、「家庭でのだらしなさ」の3因子が見出

された。この各因子を下位尺度として「父親役割認知尺度」を作成した。

本尺度の作成にあたっては、自由記述によって、現代の青年から生の声を集め、項目を選定したことから、現代に生きる青年期の男女がどのような面で父親を肯定的・否定的に認知しているかを十分に把握できたように思う。

肯定感の3つの下位尺度は、「人間的魅力」が社会人としての父親の役割、「家族との親和」が夫としての父親の役割、「子どもとの親和」が子どもの養育者としての父親の役割を表しているものと解釈できるのではないだろうか。

また、各下位尺度に注目すると、「人間的魅力」の内容は、人間的魅力の中でも社会的に美德とされる項目から構成されている。さらに「父親はよい手本である。」という項目がこの尺度に含まれていることを考慮すると、「人間的魅力」は、手本となる社会的人格的美徳とすることができよう。これは、Bandura, A. ら社会学習理論派が提唱した「家族のために働き社会経済的な達成を遂げる父親の役割」に当たると考えられる。つまり、社会学習理論派が「道具的役割」と述べたものと同様であると解釈できる。昨今において、父親や社会を取り巻く環境は少しずつ変化を見せているものの、「男性が外で働き、子どもにとって道具的役割を持つ」という近現代における図式は変化していないと考えられる。

「家族との親和」は、社会学習派理論の「母親における表出的役割」と考えられる。この尺度では、家族に対する親和的内容と共に、“思いやり”や“やさしさ”に関する項目が含まれる。これは、以前は外に働きにでる道具的役割のみが父親の役割であったのに対し、母親が担っていた“愛情”、“いたわり”、“共感”といった表出的役割の一端を父親にも担ってほしいという期待が認知者側にあると言えるのではないだろうか。確かに家族を題材としたドラマや映画に描かれているのは、いわゆる“マイホームパパ”と呼ばれる家族とのふれあいを重んじ、優しくおおらかな父親であることが多くなっているように思われる。また、働きすぎの父親たちを職場から家庭へ戻そうとする昨

今の社会の流れを考えても、父親が「家族との親和」傾向を持つことは現代社会からの要請であるといえよう。

そして、「家族との親和」と共に社会学習理論の中で男性の役割として取り上げられていないのが「子どもとの親和」であろう。本研究で作成された「子どもとの親和」の特徴は、「あなたと一緒に行動する時間を作ってくれる。」といった幼少期から青年期まで共通する項目と同時に、「物質的援助をしてくれる。」という項目が含まれることにあるだろう。青年期においては子どもが年齢的にほぼ成人していることから、最も父親からの助けとなるのが、お金や物といった物質的援助であることは想像に難くない。従来は、養育や愛情といった内容から構成される尺度は多くあったが、物質的援助という現実的な項目が抽出されたのは大変興味深い。また、この項目は予備調査の時点で女性の被験者に圧倒的に多い回答であった。つまり、現代の父親は、息子であれば共通の趣味などを通して一緒に行動し、娘であれば、車で送り迎えしたり、物を買ってあげたりすることで、子どもとの親和をはかっていると捉えられよう。

また、Erikson, E. H. が「自我同一性の確立は、これまでの発達段階を統合することである。」と言及しているように、父親との親和に関しても、青年期において、幼少時から現在にいたるまでの体験を回顧しつつ、統合的に考えていることが幅広い項目の所以だと考えられる。

さて、3尺度間の被験者内比較を見ると、男女共に最も尺度得点が高かったのは「人間的魅力」であった。これは、まもなく社会人としてひとり立ちしてゆく青年期の男女にとって、まずは一人の大人としてのモデルとして父親を捉えていることが影響しているのではないだろうか。2番目に「家族との親和」、3番目に「子どもとの親和」の得点が高かったのも、大学を卒業してまずは社会人になり、続いて男性は夫に、女性は男性を夫として見る妻になり、その後、子どもが生まれ、男性は父親に、女性は男性を父親として見る母親になるという一連の将来の見通しを反映していると考えられる。

次に否定感因子について考えてみる。抽出された3因子は、「母親への親和欠如」、「自己中心的態度」、「家庭でのだらしなさ」であった。先行研究において、父親に対する否定的な認知を扱ったものはごくわずかであることから、否定感に関する尺度は重要な意味を持つといえるだろう。

「自己中心的態度」は、意味的に2つの要因が混合した尺度になっている。一方は、“頑固親父的部分”であり、他方は“干渉的部分”である。前者については、かつて、わが国には“頑固親父像”なるものが存在した。巨人の星における星一徹のような父親像である。まだ家父長制の残る時代において父親像のなかには「自己中心的態度」に見られるような父親が数多く存在したのではないだろうか。しかしながら、肯定感に、表出的役割ともいえる「家族との親和」や「子どもとの親和」が抽出されたことと背中あわせに古い父親像として「自己中心的態度」が否定的な側面で抽出された格好になったと考えられる。

また、後者については、Hollingworth, L. S. (1928) は、「およそ12歳から20歳の間に、青年には親の監督から離れて独立した人間になろうとする強い衝動が生ずる。」と述べ、このような過程に対して「心理的離乳 (psychological weaning)」と名づけている。この時期の青年は、親からの分離・独立の時期であり、親からの干渉をうるさがり、自らの考えや判断で行動しようとするようになる。それが余計に「自己中心的態度」を否定的に捉えさせているのかもしれない。

次に「母親への親和欠如」であるが、前述したように父親を評価する際の重要な要素として、多くの先行研究で「両親間の親和」が見出されており、本研究でも同様に「母親への親和欠如」が見出された。「母親への親和欠如」の最も大きな特徴は、母親に対する態度や母親の扱いが上位にあることといえよう。当初、抽出された要因として女性における母親同一視の影響を考えたが、男女間比較において得点の差がないことから、男女共通した要因によるものだと考えられる。そうすると、この尺度は現代における母子の密着した関係が影響するところが大きいように感じられる。現在の

母子密着状況において、子どもにとって母親は最も大切な存在であると考えられる。その大切な存在に対して、不適当な扱いをする父親の態度は、大きな否定感として捉えられるであろう。さらに特徴的なのは、「父のようにはなりたくない」という項目が「母親への親和欠如」に含まれていることにあるのではないだろうか。つまり、否定感の中でも最も父親に対する嫌悪感を意識させるのが、母親に対する態度であるということができよう。

山添（1981）の研究において「父親の生活態度一般に対する不適切性」が女子大学生の分析から抽出されたように、本研究で抽出された「家庭でのだらしなさ」に関しては、全尺度の中で唯一、男性よりも女性で強く感じられていると言う結果になった。項目を細かく見ると、生活におけるだらしない行動や態度に加えて、家庭生活に対する非協力的な態度が含まれている。これは、肯定観において「家族との親和」が抽出されたことのいわば背中あわせとなっているといえるだろう。また、「家の中でだらしない行動をする。」や「後片付けをしない。」といった項目は、予備調査の集計の時点で女性に多い回答であった。そのことから、「家庭でのだらしなさ」は異性としての父親の魅力を損なうと共に、すでに女性が父親を将来の自分の夫のモデルとして、捉えていることを示唆しているとも考えられるのではないだろうか。

本研究から明らかになった現代の青年期男女から見た父親像をまとめると、理想的な父親像とは、「社会人としての社会的な美德を持ち」、「家庭を大切に」、「子どもと親和的な父親である」と言えよう。反対に非理想的な父親とは、「母親を大切にせず」、「自分勝手に」、「だらしない父親」だと言えよう。

全体として解釈するならば、これまで父親は会社中心で家族のために働く役割が最も評価されていたのに対し、次第に家族との関係や家庭の中で、養育者であったり、家族の一員としての役割が重視される方向に変化したといえるのではないだろうか。

5. 2 青年期における課題達成と

父親要因の関係について

5. 2. 1 父親要因と性役割観

本研究においては、父親要因として「父親役割認知尺度」の6尺度を用いた。結果は前述のとおりである。

父親要因と性役割観の関係では、まず、「人間的魅力」が男女とも男性性の発達に影響を与えることが明らかになった。これは、Bandura, A.ら社会学習理論派が提唱した「父親の道具的役割は、男性性に影響を与えるものである。」という理論を支持するものだと考えられる。また、男性において「子どもとの親和」が男性性に影響を及ぼしていることは、Freud, S.が述べた同一視の理論に関係があることが推察される。ここまでは、先行研究や多くの優れた理論の追試的な意味合いになるであろう。

本研究で新たに見出されたことは、女性においては、他に性役割観と父親要因との関係が全く見られないのに対し、男性においては、肯定感の3尺度が全て女性性にプラスに影響し、また否定感の3尺度が全て女性性にマイナスに影響している点である。つまり、男性において、父親要因が女性性の発達に影響を及ぼしていることが明らかになった。分散分析の結果を加味すると、男性では父親肯定群の女性性得点が父親否定群の女性性得点よりも高い傾向があることから、父親に対する肯定感は、男性の女性性の発達に影響するといえる。

また、女性では父親肯定群の方が父親否定群よりも男性性得点が有意に高いことから、女性の男性性の発達に影響を与えるといえる。

これまでの同一視理論や社会学習理論では、両親は生物的性が一致した社会的性に影響を与えられていた。その理論に沿って考えると、女性において、父親要因が女性性に一切影響を及ぼしていないことは、母親に対する同一視やモデリングによって、母親からの影響が女性性の発達に大きく影響していることが考えられる。しかし、従来の父親は道具的役割のみをもつという理論で

は、父親要因が男性の女性性に影響を与えることは説明できない。

よって、以上の結果は、父親の役割が大きく変化していることを示唆していると考えられる。つまり、以前は道具的役割をもち、男性性の発達に影響を及ぼすのが父親の役割であったのに対して、現代の父親は、道具的役割に加えて、女性性の発達に影響を与える表出的役割も担っていると言える。

男性における女性性の内容を概観してみると、“人に気をつかい、子供をかわいがり、親切で、やさしく、思いやりのある”という内容であったこと、さらに本研究で作成された父親役割認知尺度の内容にも表出的役割と解釈できる尺度が幾つか含まれていることを考慮すると、現代の父親はより表出的な役割を取ることが期待されていると言える。

男性においては、父親が期待通りに表出的役割を取ることによって、今まで母親から影響を受けると考えられていた表出的役割が、現代では母親のみならず、父親から影響を受けるようになったと言えるのではないだろうか。確かに母親の表出的役割は、あくまで女性としての表出的役割であり、父親から男性としての表出的役割を学ぶことは、男性にとって大切なことだと考えられる。そして、このような父親の表出的役割を男児が、モデリングすることによって、女性性の発達が促されたと考えられる。

5. 2. 2 性役割観と同一性・親密性

本研究においては、男性では、同一性得点が親密性得点よりも高く、女性では、同一性得点と親密性得点に差がないという結果が得られた。つまり、男女とも、同一性が親密性の先行条件として獲得されるが、女性では両者が同時並行的に発達すると解釈できるのではないだろうか。

高橋（1988）では、男性の男性性が同一性と女性性が親密性と関連を持ち、女性の男性性が同一性・親密性と関連を持つとされていた。女性においては、先行研究を支持する結果が見られたが、

男性においては、女性性と親密性の間に関連はなく、男性性が同一性・親密性の両方に影響を及ぼしていることが明らかになった。

つまり、性別に関係なく、同一性・親密性の獲得に、影響を及ぼすのは男性性であると言える。

青年期および成人期の男女が同一性・親密性を獲得することは、自分が何者であるかという揺ぎ無い自己意識を作り上げ、さらに他者との関係において重大な犠牲を払おうとも親密な関係を保つという、いわば個人が一人の成熟した大人として社会に適応するための能力を獲得すると言うことができよう。

1980年代の時点で、かつては、男は家の外へ、女は家の中へという時代は終わり、今や男も女も家の外へ働きに出ると言う時代になったと言われていた。男女において、共通して主に意識される男性性のイメージは、“信念がある”、“やる気がある”、“意思が強い”であったことを考慮すると、社会に一人の成熟した大人として適応できる能力を獲得するためには、上記にあるような男性性役割の獲得が必要とされていることは、依然として変わらず男女共通の課題であると言える。

5. 2. 3 父親要因と同一性・親密性

全体として、男性では、「人間的魅力」と「子どもとの親和」が男性性に影響を及ぼし、男性性が同一性・親密性に影響を及ぼすと言う、男性性を媒介として、父親要因が同一性・親密性に影響を与える過程が明らかになった。

また、女性では、男性と同様に「人間的魅力」が男性性に影響を及ぼし、男性性が同一性・親密性に影響を及ぼす過程が明らかになった。また同時に、「子どもとの親和」と「母親への親和欠如」が直接的に親密性に影響を及ぼす過程が明らかになった。

父親要因と同一性・親密性との直接的な関連については、あまり研究がなされていない。本研究では、パス解析および分散分析の結果ともに、男性では直接的関連はなく、女性においては親密性に対して、父親要因が直接影響を与えることが明

らかになった。

つまり、父親要因と親密性の発達の過程に明らかかな性差が見られたのである。

ここで親密性について今一度考えてみたい。親密性とは、序論で触れたように、自らの同一性を他人のそれと融合させる能力であり、たとえ重大な犠牲や妥協を要求されても、親密な友情関係や異性との親密な関係などを守り続ける能力である。

男性の親密性発達には、父親から影響を受けて発達する男性性が前提条件となっている。これに対して女性では、父親要因の中でも、特に「子どもとの親和」と「母親への親和欠如」が直接的に親密性発達に影響を与えるという結果が得られた。このことは、父親の母親に対する態度、娘である自分に対する態度、すなわちもっとも身近な女性である母親に対し、自分に最も身近な男性である父親がどのように振舞うかが、娘が成人期を迎えた際に必要となる、異性との間で同一性を融合させる能力である親密性に影響を与えていると解釈できるのではないだろうか。

よって、父親が子どもや母親に対しての親和的態度を持つことは女性が青年期から成人期において、色々な人々と親密な関係が保てるかどうかを大きく左右すると言えるだろう。

5. 3 要約と今後の課題

本研究では、父親要因が子どもの発達に影響を及ぼす過程の概観を試みた。結果においては仮説が支持されないこともあったが、当初の目的を十分満たすものであったと筆者は考えている。

序論でも触れた通り、昨今においては、「父性の欠如」が盛んに叫ばれている。現代社会においては、男女共に男性的であるほうが社会適応的であることを考えると、男性性発達を促進させるような父親役割が弱体化していることは、大きな問題と言えよう。

確かに本研究の結果からも、父親は、以前はあまり必要とされていなかった表出的役割を取ることが期待され、その期待に答えるべく表出的役割

を実際に果たしていることが明らかになった。

確かに過剰な表出的役割への期待と遂行は、父親から子どもへの道具的役割の影響を弱体化させる可能性があるだろう。しかし、本研究の結果からは、男性性発達を促進させるような父親の道具的役割の影響が弱体化したという結果は見出されていないし、表出的役割が増えることと道具的役割が減ることは、イコールではないと考えられる。

そして、大切なことは、父親の表出的役割を道具的役割との関係だけにおいて論じるのではなく、表出的役割自体の重要性にも目を向けることであろう。確かに、子どもの性役割観や同一性や親密性の発達のためには、父親の道具的役割が必要不可欠である。しかしながら、本研究の結果が示すとおり、子どもに対して親和的であることは、子どもの発達への影響を考慮する上で、必要不可欠な父親の役割であると言える。

以前から、父親は仕事中心であるべきか、家庭中心であるべきかと言う論争がなされているが、結論としては、どちらに偏ることもなく、仕事も家庭もこなす父親が最も子どもの人格発達に良い影響を与えられるだろう。

さて、本研究において興味深い結果が得られた一方で、父親役割認知尺度のより厳密な標準化の作業、性役割観尺度の見直し、母親の役割認知とその影響の検討などが今後の課題として挙げられる。

今後は以上の課題を改善すると共に、本研究で得られた知見を臨床場面で生かしていけるよう、さらに研究を深めていきたい。

<付記>

本論文は、2002年度北星学園大学社会福祉学研究科心理学専攻修士課程において、修士論文として作成されたものに加筆、修正を加えたものです。

研究の初めから終わりまで、熱心なご指導と多くのご助言を頂きました遠山尚孝先生には、心より感謝を申し上げます。また、本論文をまとめるに当たってご指導いただいた今川民雄先生に感謝申し上げます。そして調査にご協力いただきました諸学校の先生方および被験者の皆さんに御礼申

上げます。

新しい視座—同一性と親密性との関連について—
八代学院大学紀要, Vol. 40, 51-63.

引用文献

安達圭一郎・上地安昭・浅川潔司 1985 日本版BSRI 堀
洋道・山本真理子・松井豊編(1994)「心理尺度ファイル —
人間と社会を測る—」 垣内出版

Bandura, A. 原野広太郎監訳 1979 社会的学習理論
金子書房

Bem, S.L. 1974

The measurement of psychological androgyny.
Journal of Consulting and Clinical
Psychology, Vol. 42, 155-162.

土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度
堀洋道監修・吉田富二雄編(2001)「心理測定尺度集Ⅱ」, 163-
169. サイエンス社

土肥伊都子 1999 ジェンダーに関する自己概念の研究〜
男性性・女性性の規定因とその機能〜 多賀出版

Erikson, E.H. 小此木啓吾訳編 1973 自我同一性—アイ
デンティティとライフ・サイクル— 誠信書房

Erikson, E.H. 仁科弥生訳 1977 幼児期と社会Ⅰ みす
ず書房

Evans, R.I. 岡道哲雄・中國正身訳 1981 エリクソンは
語る—アイデンティティの心理学— 新曜社

東清和・小倉千加子 2000 ジェンダーの心理学(ワセダ・
オープンカレッジ双書4) 早稲田大学出版部

伊藤彩 1994 大学生における自我同一性・親密性の発達—
性差を中心にして—
明星大学心理学年報, Vol. 12, 15-24.

石川英夫 1985 父親関係に関する心理学的研究—大学生
の父親像について—
東京経済大学人文自然科学論集, Vol. 70, 39-92.

伊藤美奈子 1991 Erikson理論から見た現代青年に対する

伊藤隆二・橋口英俊・春日喬編 1994 思春期・青年期の
臨床心理学 (人間の発達と臨床心理学4) 駿河台出版

柏木恵子 1993 父親の発達心理学—父性の現在とその周
辺— 川島書店

松木邦裕 1986 性別同一性 (Gender Identity) から見た
神経性無食欲症者とその父親
九州神経精神医学, Vol. 32, No. 2, 133-140.

宮下一博 1987 ラスムッセンの自我同一性尺度日本語版
堀洋道監修・吉田富二雄編(2001)「心理測定尺度集Ⅱ」, 76-
85. サイエンス社

小野寺敦子 1984 娘から見た父親の魅力
心理学研究, Vol. 55, No. 5, 289-295.

小野寺敦子 1993 日米青年の親子関係と独立意識に関す
る比較研究 心理学研究, Vol. 64, No. 2, 147-152.

小倉千加子 2001 セクシュアリティの心理学 有斐核

落合良行・楠見孝編 1995 自己への問い直し—青年期—
(講座 生涯発達心理学 第4巻) 金子書房

Spigelman, G. & Spigelman, A., Englesson, I. 1991
Hostility, Aggression, and Anxiety Levels of Divorce
and Nondivorce Children as
Manifested in Their Responses to Projective Tests
Journal of Personality Assessment
, Vol. 56, No. 3, 438-452.

高橋裕行 1988 女子大学生の自我同一性と親密性の性役
割志向性との関連：特に心理学的男性性を中心にして 福
井大学教育学部紀要Ⅳ (教育科学), Vol. 43, 23-29.

高尾兼利 1989 父性について 西九州大学・佐賀短期大
学紀要, Vol. 20, 85-92.

戸田弘二 1990 女子青年における親の養育態度の認知と
Internal Working Models との関連 北海道教育大学紀

要（第1部C）,41,No.1,91-99.

山添正 1979 男子の社会—人格適応における父親の要因
についての考察 山梨大学教育学部研究報告,Vol.30,126-
134.

山添正 1981 大学生の父親像の研究 山梨大学教育学部
研究報告,Vol.32,122-128.